

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 25 日現在

機関番号：34510

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520164

研究課題名（和文） 「ピアニスト」の誕生を考える：明治末期から大正初期の  
本邦洋琴家事情の解明

研究課題名（英文） The Birth of Pianist in late Meiji and early Taisho Japan

研究代表者

津上 智実（TSUGAMI MOTOMI）

神戸女学院大学・音楽学部・教授

研究者番号：20212053

研究成果の概要（和文）：

3年間の本研究期間中に6回の研究会を開催し、計20本の研究発表(内2本はゲストによる)を行なって、課題の解明と理解の深化に資することができた。その成果は、雑誌論文14件、図書5件、国際学会発表1件、海外特別講義1件に結実し、博士論文の一部としても生かされた。2011年秋には台東区立東京音楽学校奏楽堂で展示「ピアニスト小倉末子と東京音楽学校」(10/1～12/15)と記念演奏会(11/3、11/23)を行って成果の一端を広く一般に公開し、その様子は台東区ケーブルテレビで4回報道された。

研究成果の概要（英文）：

Our three years research project contained six seminars in which our members and one guest researcher read twenty papers in total. It resulted in the publication of fourteen papers and five books, as well as one presentation at an international conference in Beijing and one special lecture in Seoul, as well as a part of a doctoral thesis. Its results were made public in the exhibition 'OGURA Suye and Tokyo Ongaku Gakkou' and two memorial concerts held in the Old Music Hall of Tokyo Ongaku Gakkou of Taito Ward in autumn 2011, and broadcast four times on Taito Ward Cable Television.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：音楽学

## 1. 研究開始当初の背景

2009年春に研究者7名で研究会を立ち上げ、定期的にメンバーの研究発表と議論を行うと共に、日本音楽学会第60回全国大会(2009年10月25日、於：大阪大学)において、メンバー5名(津上、武石、塩津、辻、藤本)によるシンポジウム「『ピアニスト』の誕生」を行なった。多数の来聴者を得て、質疑応答も活発に行なわれ、このテーマに対する関心の高さを実感することができた。これが本研究の発端となった。

## 2. 研究の目的

本研究は、「ピアニスト」という存在の出現とその音楽史的、社会史的意義の解明を目的とする。フィールドとしては明治末期から昭和初期、1890年代から1930年代の日本を選んだ。明治政府の欧化政策が進展し、帝国主義化の一方で欧米の近代的な思想や文化が日本に根付きつつあったこの時期に、「ピアニスト」という存在と概念もまた成立したのではないかとの仮説を立てて検証し、歴史の実像を明らかにするのが本研究の主眼である。近代の音楽活動の中核を担いながらも、従来の音楽研究で見過ごされてきた「ピアニスト」という存在に光を当てて、その出現の実像を明らかにすることは、近代以降の日本の社会と音楽文化を理解する上で不可欠であると考えられる。

## 3. 研究の方法

本研究では、以下の8つの小問を立て、これらの解明を通じて、明治末期から昭和初期に至る洋楽受容の大きな流れを「ピアニスト」を軸に描き出すことをめざした。1) 「ピアニスト」に相当する語はいつから、どのような形で用いられるようになったのか、2) 「ピアニスト」と呼ぶに値する演奏家が日本に現れたのはいつか、それは誰か、3) 知名のピアニスト久野久子(1885~1925)と小倉末子(1891~1944)の実像、4) 「ピアニスト」の出現を可能にした社会的背景、5) 演奏会の組織団体(東京の音楽奨励会や大阪のピアノ同好会、戦時体制下の日本音楽文化

協会等)の活動と功績、6) 「ピアニスト」の活動を支えた聴衆と音楽愛好家の存在、特に女性層ないしジェンダーの問題、7) 「ピアニスト」成立の先決要件である楽器の問題(輸出入と国産、製造と販売に見られるピアノの普及度)、8) 教育システムとピアノ教育のあり方(教本と教則本、各種音楽学校、門弟の系譜という問題)、以上の8つである。

具体的には、明治期以降の一次資料(書簡、日記、公文書、新聞、雑誌記事、演奏会プログラム、録音資料等)調査、演奏家(久野久子、小倉末子、東京音楽学校ピアノ教師他)研究、演奏会組織団体(関東と関西、戦時体制下)の研究、楽器(輸出入、国内製造と販売等)研究と教育システム(教材、カリキュラム、試験問題、師弟関係を含む)研究により、本邦における「ピアニスト」出現を多面的に解明することを行なった。そのため関連領域研究者7名の共同研究体制を採り、研究会での各人の研究発表と議論を3年間積み重ねた。

## 4. 研究成果

本研究においては、3年間の研究期間中に6回の研究会を開催し、計20本の研究発表(内2本はゲストによる)を行なって、課題の解明と理解の深化に資することができた。その成果は、雑誌論文14件、図書5件、国際学会発表1件、海外特別講義1件に結実し、博士論文の一部としても生かされた。

以下に、上記「3. 研究の方法」で挙げた小問8つの各々について成果の概略を記す。

上記1) 「ピアニスト」に相当する語の出現については、大阪音楽大学音楽博物館「関西音楽記事集成」に依って調査した結果、明治28年の「ピアノー楽手」「ピアノ師」が初出であること、明治30年に「ピヤニスト」、明治38年に「ピアニスト」が出現し、後者が明治40年代に広く用いられて定着していったことが明らかになった。

上記2) 「ピアニスト」と呼ぶに値する演奏家の出現については、まず「ピアニスト」という用語の定義から考える必要があった。ニューグローブ音楽事典を始めとして、従来の音楽事典等には意外にも「ピアニスト」が

立項されていないため、暫定的に次のように定義した。すなわち、「ピアニスト」とは「プロフェッショナルなピアノ奏者を指す。単独で一夕のコンサートを担いうるだけの技量とレパートリーを備えたピアノ弾き、一人で聴衆を呼び込むことができるだけの魅力と名声を備えたピアノの演奏家を意味する。愛好家とは区別され、ピアノの弾ける音楽教師も含まない。」

実際にこのような存在が出現したのは明治期というよりはむしろ大正期であったことが、本研究によって明らかになった。

上記3) 初期ピアニストである久野久子(1885-1925)と小倉末子(1891-1944)の活動実態については、新聞や音楽雑誌の記事調査および演奏会プログラムの調査によって、その演奏活動の実態解明を行なった。久野久子については研究協力者の辻浩美、小倉末子については津上智実が調査に当たり、その結果は共著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(東京芸術大学出版会、2011)において、辻浩美著のコラム「ピアニスト久野久子」(68-70頁)、津上智実編「小倉末子演奏活動一覧」(108-117頁)として公表した。

上記4) 「ピアニスト」の出現を可能にした社会的背景については、日露戦争後の熱気の中でピアノ演奏の新たな形態が出現し、第一次世界大戦による国際的な音楽家の移動によって「ピアニスト」とその演奏の場が確立したと考えられる。

上記5) 演奏会の組織団体の活動と功績については、藤本寛子が東京の音楽奨励会や演奏会を開催する環境(法体制)、塩津洋子が大阪のピアノ同好会、戸ノ下達也が戦時体制下の日本音楽文化協会について調査研究を進め、各々、博士論文(藤本寛子「日本音楽会の研究—明治時代中期の東京における音楽活動とその組織—」お茶の水女子大学大学院博士乙第317号)の一部、著書(下記「5」「図書」①②)、雑誌論文(下記「5」「論文」⑫)に結実した。

上記6) 「ピアニスト」の活動を支えた聴衆と音楽愛好家の存在、特に女性層ないしジェンダーの問題については、塩津洋子と辻

浩美、津上智実の3人が担当した。塩津洋子は大阪、京都と神戸の女性の音楽活動、辻浩美は日本女子大学の音楽活動、津上智実は関西婦人会連合大会と閨秀洋楽演奏家たちについて、並びに『淑女画報』や『婦人画報』といった婦人雑誌における閨秀音楽家の扱いについて調査研究を行い、各々雑誌論文等として結果を公表した(下記「5」「論文」③④⑤⑥⑩⑫)。

上記7) 「ピアニスト」成立の先決要件である楽器の問題(輸出入と国産、製造と販売に見るピアノの普及度)については、武石みどりが調査研究に当たり、その結果は共著『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』(東京芸術大学出版会、2011)において、武石みどり著コラム「ピアノ」(68-70頁)として公表した。

上記8) 教育システムとピアノ教育のあり方については、橋本久美子が東京音楽学校研究で成果を挙げた(下記「5」「論文」②⑬⑭)が、教材および教則本については、史料収集の実は上がったものの、内容に踏み込んだの検討には至らず、今度の課題として残された。初期ピアニストの教育に関わったミッション・スクールにおける音楽教育の体系的解明も、今後の重要な課題である。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計14件)

① 津上智実、図書館の宝物から(その2) ジョージ・コールマン・ガウ著の音楽理論書『音楽の構造』(1895年頃)、神戸女学院学院史料、査読無、26巻、2013、12-20

② 橋本久美子、乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校(4)、東京芸術大学音楽学部紀要、査読有、38集、2013、87-104

③ 津上智実、明治大正期の『婦人画報』(1905~1926)に見るピアニスト小倉末子と女性の教養、神戸女学院大学論集、査読無、59巻2号、2012、169-182

④ 津上智実、婦人グラフ雑誌『淑女画報』(1912~1923)に見る小倉末子と閨秀音楽家

たち、神戸女学院大学論集、査読無、59 巻 1 号、2012、121-132

⑤ 塩津洋子、明治期神戸のピアノ演奏、大阪音楽大学音楽博物館年報 音楽研究、査読無、27 巻、2012、1-16

⑥ 津上智実、「神戸女学院仕込み」のピアニスト小倉末子、神戸女学院大学論集、査読無、58 巻 2 号、2011、113-128

⑦ 津上智実、婦人宣教師シャーロット・デフォレストの音楽活動：オペラ歌手柴田（三浦）環との共演、神戸女学院大学論集、査読無、57 巻 1 号、2011、163-176

⑧ 塩津洋子、[研究資料] 明治期神戸のピアノ演奏記録、大阪音楽大学音楽博物館年報 音楽研究、査読無、26 巻、2011、41-65

⑨ 津上智実、シャーロット・デフォレストの楽譜：『ヴァーグナー楽劇選集』（ピアノ独奏用編曲版）、神戸女学院史料室 学院史料、査読無、25 巻、2010、35-42

⑩ 津上智実、ピアニスト小倉末子と大正期の女性運動、神戸女学院大学女性学インスティテュート 女性学評論、査読無、25 巻、2010、95-118

⑪ 戸ノ下達也（研究協力者）、「戦争の時代」から戦後の音楽文化、礼拝と音楽、査読無、146 号、2010、38-42

⑫ 塩津洋子、「ピアノ同好会」の活動、大阪音楽大学音楽博物館年報 音楽研究、査読無、25 巻、2010、1-14

⑬ 橋本久美子、乗杉嘉壽校長時代の東京音楽学校 昭和3年～20年—その建学の精神の具現化と社会教育論の実践— (3)、東京芸術大学音楽学部紀要、査読有、36 集、2010、179-194

⑭ 橋本久美子、東京音楽学校生の陸軍軍楽隊入隊（後編）、藝大通信、査読有、22 号、2010、26-27

[学会発表] (計 2 件)

① TSUGAMI Motomi: The Early History of Music Education at Kobe College, Japan, a mission school founded in 1875、Special Lecture at Ewha Music Research Institute, 2013 年 5 月 3 日、韓国、梨花女子大学

② TSUGAMI Motomi: Music making in Meiji Era Japan: Musical activities of a woman missionary, Charlotte De Forest (1879-1973)、国際美学会第 18 回大会、2010 年 8 月 12 日、中国、北京大学

[図書] (計 5 件)

① 戸ノ下達也（研究協力者）・洋楽文化史研究会編、別巻「戦う音楽界—『音楽文化新聞』とその時代」、金沢文圃閣、2012、406

② 戸ノ下達也（研究協力者）・洋楽文化史研究会編、『音楽文化新聞』『音楽文化協会会報』全 3 巻、金沢文圃閣、2011、856

③ 辻浩美（研究協力者）、『作曲家・吉田隆子 書いて、恋して、闊歩して』、教育史料出版会、2011、149

④ 津上智実、橋本久美子、大角欣矢、『ピアニスト小倉末子と東京音楽学校』、東京芸術大学出版会、2011、2-123

⑤ 津上智実、『100年前の卒業生：ピアニスト小倉末子の軌跡展、図録』、神戸女学院「小倉末子展」実行委員会、2010、72

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

津上 智実 (TSUGAMI Motomi)  
神戸女学院大学・音楽学部・教授  
研究者番号：20212053

### (2) 研究分担者 (3 名)

武石 みどり (TAKEISHI Midori)  
東京音楽大学・音楽学部・教授  
研究者番号：70192630

塩津 洋子 (SHIOTSU Yoko)  
大阪音楽大学・音楽博物館・准教授  
研究者番号：80140177

橋本 久美子 (HASHIMOTO Kumiko)  
東京芸術大学・総合芸術アーカイブセンター・特任助教  
研究者番号：70401495

### (3) 連携研究者

(0 名)

研究者番号：

(4)研究協力者（3名）

辻 浩美 (TSUJI Hiromi)

茨城県立取手松陽高等学校音楽科講師  
音楽学研究者

藤本 寛子 (FUJIMOTO Hiroko)

お茶の水女子大学大学院博士論文提出者  
音楽学研究者

戸ノ下 達也 (TONOSHITA Tatsuya)

洋楽文化史研究会代表幹事